「主の日」

ヨエル書第２章３０節～３章２１節

京都秋期特別集会　第３回集会　１９７９年１１月２５日

小池辰雄

# 【見出し】

●悔改と新生　　●遺れる者　　●劇的な有機体的な神学　●審判の時　　●聖霊という霊子　　●祈り

【ヨエル２】

30また天と地にをさん 即ち血あり火あり煙の柱あるべし 31 エホバの大なる畏るべき日のらんに 日は暗く 月は血に変らん 32 凡てエホバの名を呼ぶ者は救わるべし そはエホバのいし如く シオンの山とエルサレムとに救われし者あるべければなり 其れる者の中にエホバの召し給えるものあらん

【ヨエル３】

1 よ 我ユダとエルサレムのを帰さん その日その時 2万国の民を集め 之を携えて ヨシヤパテの谷にくだり かしこにて我民 我ゆずりの産なるイスラエルのために彼らをさばかん 彼らこれを国々に散らして その地を分かち取りたればなり 3彼らはをひきて 我民を取り をにえ を売り 酒にて飲めり 4ツロ、シドンよ ペリシテのすべての国よ 汝ら我と何のかかわりあらんや 汝ら我がなししことにをなさんとするや し我にをなさんとならば 我ちに汝らがなししことをもてそのに帰らしめん 5是は汝らは我の金銀を取り 我のしたうべき宝を汝らの宮にたずさえゆき 6またユダの人とエルサレムの人をギリシヤ人に売りて その本国より遠く離らせたればなり 7視よ 我かられをして 汝らが売りたる処よりし 汝らがなししことをもて その首にかえらしめん 8我はなんじらのをユダの人の手に売り 彼らは之を遠き民なるシバ人に売らん エホバこれを言う

9もろもろの国につたえよ のをし 勇士をはげまし をことごとくちかより来らしめよ 10 汝等のをに打ちかえ 汝らの鎌をに打ちかえよ 弱き者も我は強しと言え 11 の国々の民よ 汝ら急ぎ上りて集れ エホバよ 汝の勇士をかしこに降したまえ 12 国々の民よ て上り ヨシヤパテの谷に至れ に我座をしめて 四周の国々の民をことごとくかん 13 鎌をいれよ 穀物は熟せり 来り踏めよ はち は溢る 彼らの悪なればなりと

14 かまびすしきかな 無数の民の谷にありてかまびすし エホバの日審判の谷に近づくが故なり 15 日も月も暗くなり 星そのを失う 16 エホバ、シオンよりよびとどろかし エルサレムより声をはなち 天地を震いうごかしたもう 然れどエホバはその民のイスラエルの子孫の城となりたまわん 17 かくて汝ら我はエホバ汝等の神にして我シオンに住むことをしるべし エルサレムは聖き所となり の人は重ねてその中をかようまじ

18 その日山にあたらしき酒り 岡に乳流れ ユダのもろもろの河に水流れ エホバの家より流れいでて シッテムの谷にがん 19 エジプトは荒れすたれ エドムは荒野とならん 是はかれらユダの子孫をげ なき者の血をその国に流したればなり 20 されどユダはにすまい エルサレムは世々に保たん 21 我さきにはかれらが流しし血の罪を報いざりしが 今はこれをむくいん エホバ、シオンに住みたまわん

# ●悔改と新生

ヨエル書２章の３０節から３章の終わりまで。ヘブライ語のマソラテクスト（Masoratic Text）の原文でいうと、日本語の聖書の２章２８節から３２節までが第３章です。そして、日本語の聖書の３章がヘブライ語の４章です。ヘブライ語の３章即ち２章２８節から２章の終わりまで、非常にこれは大事なところです。前回は２章２８節と２９節が一番のピークだったわけです。今日の３０節、

30また天と地にをさん 即ち血あり火あり煙の柱あるべし 31 エホバのなるるべき日のらんに 日は暗く 月は血に変らん

こういうカタストローフが、天変地異が突然として起こってくる。そういうような光景は、新約でキリストもマルコ伝１３章で言っておられますが──黙示録はいうまでもないです──旧約の預言書にはしばしば出てくる。地上には的に神の国が来るのではない。大変動が起きる。そして、その大変動というのは、一面においてはであり、一面においては救いの前兆である。なぜ、そういうことであるかというと、要するに、人間の「罪」というこの現実が、神さまをしてやむを得ずそういことをさせることになる。本当は、創世記の第１章にあるように、「すべてのことが善し」と、

「善かりき、善かりき」〔善と観たまえり〕

と書いてある。その「善かりき」が善くなくなってしまった。「パラダイス・ロスト」（楽園喪失）です。アダム・イブの、あれはもちろん神話的な物語です。けれども、神話的物語を通して、実は人間の現実をさながらに語っているわけです。いわゆる「神話」ではない。語られる形式が神話であっても、これは啓示の神の言葉である。それが神の御意の最後の完成のためには、どうしても大変動が起きなくてはならない。しかしながら、その大変動は実は各人がその生涯においてこのカタストローフを経なければ、その世界に入れない。それが即ち本当の、本当の新生です。我々の――新しく生きること、死生の転換です――人間の心の中の死生の転換ということ。これは人間は自分ではできない。

それを、このカタストローフをハッキリやった人がある。これは使徒たちの中では何といってもパウロです。パウロはまた自分でやったのではない。キリストに否応なしにさせられた。ですから、神の歴史というものは、我々の生涯の歴史が、一人びとりの歴史が、神の歴史をその核においてやらせられる。それをやらなければ、この新天新地にこない。ですから、この聖書の創世記から黙示録に至るまでの神のもの凄いドラマは、我々が自分の生涯で何らかの形において、質においてさせられるわけなんです。それをしなければ、この神の国には迎えられない。そういう意味において、

「そんな大きなことがあるだろうか？　どうなのか？」

と、よそごとのように思ったらとんでもない。我々の心の中のカタストローフを、変動を実は示しておられる。

ダンテの『神曲』が「地獄、煉獄、天国」とあります。私は世界の詩の中でやはりダンテは第一だと思う。私はもしドイツ語でなくてイタリヤ語をやったら生涯、ダンテ研究をやっていると思います。その点で、ある意味においては、私はイタリヤ語をやればよかったなと思うくらいです。もうとにかく、ダンテには参りますね。どうぞ、若い人は『神曲』は読んで下さい。大変なもんです、ダンテという人は。第２巻（『芸術のたましい』）に私は書きましたけれども、まだまだ足りないです、本当は。実は私はダンテの文献は一番たくさん持っている。彼が地獄を遍歴し、それから煉獄の山を登り、天界に行く。あれは全部、彼自身の心の旅なんです。地獄のどの罪びとにおいても、彼は自分の姿をまたそこに映しているわけです。でなければ、あんな深刻なものは書けない。また、聖書というこの大ドラマ――教えではないです、聖書は――この神の大ドラマは、私たちがこの生涯において、そこから本当に自分のドラマチックな生涯が、どんな静かな生涯を送っていても、心の世界には同じものがあるはずなんです。そういう意味でどうぞ、この聖書を、実は我々が自分の体験とし告白として読むような読み方になってこないと、本当に読めないですね。そういう意味において、この天変地異は実は悔改と新生のひとつの大きなドラマチックな光景であると、そういう気持で読んでいただきたい。

# ●御名を呼ぶ

「天と地にを顕さん即ち血あり火あり煙の柱あるべし」

と。これはたとえば、エゼキエル書３８章を見て下さい。ゴグ、マゴクのことが出ているところです。

「1エホバの我にのぞみて言う 2人の子よ ロシ、メセクおよびトバルの君たるマゴグの地の王ゴグに汝のをむけ 之にむかいて預言し」（エゼキエル38･1～2）

「ゴグ」というのは学問的にどの種族であるかということは、いろいろ説もあるんですが、北の方の蛮族です。大体、イスラエルは北の方からやっつけられる。そういうのがやって来て、

「7汝をなせ 汝と汝にあつまれるところの軍隊みなをせよ 而して汝かれらのとなれ 8 の日の後なんじ罰せられん 末の年に

「末の年」とか「末の日」とか、これはイザヤ書２章、エレミヤ記２３章にもあります。

汝かの剣をのがれてかえり 衆多の民の中より集りきたれる者の地にいたり 久しく荒れいたるイスラエルの山々にいたらん」（エゼキエル38･7～8）

集められて、このイスラエルにやって来ると。「ゴグの侵略があるけれども、最後は勝つぞ」という預言が３８章、３９章に出ている。１４節に、

「14 是故に人の子よ 汝預言してゴグに言え 主エホバかくいいたもう 其日に汝わが民イスラエルのに住むを知らざらんや

その時は、お前たちがかえってやっつけられる時がくると。「その日」とか「末の日」とかいう言い方がよくあるでしょ。

16 而して汝わが民イスラエルに攻めきたり 雲のごとくに地を覆わん ゴグよ 末の日にこの事あらん すなわち我汝をわが地に攻めきたらしめ

云々と。大いにやってくるが、どっこいということを神さまが仰るわけです。

18 主エホバいいたもう 其日すなわちゴグがイスラエルの地に攻め来らん日にわがにあらわるべし 19我と燃えたつ怒をもて言う

ここにも「」という言葉がでているね。

「ヤーヴェーは妬みの神」

という。即ち、イスラエルの民が他の神々に心を寄せた、そういった信仰的な堕落に対して妬みを起こすという。というのは、イスラエルをどこまでも追求して愛しぬく、救いぬくという気持がこの「妬み」という言葉の中にある。この「妬み」という言葉がおかしいですけれどもね。

其日には必ずイスラエルの地に大なる震動あらん 20海の魚 空の鳥 野の獣 凡て地にうところの 凡て地にある人 わが前に震えん　…… 22我疫病と血をもて彼の罪をたださん」（エゼキエル38･14～22）

云々と。ここは正にさっき読んだところと同じです。エゼキエル書の３８章と３９章を読むと、ことに３９章の所に来ますと、終わりの方に非常に著しい所があります。２７節、

「27 我かれらを国々より導きかえり その敵の国々より集め 彼らをもて我のき事をのにしめす時 28彼等すなわち我エホバの己の神なるを知らん 是は我かれらを国々に移し 又その地にひき帰りて 一人をもにのこさざればなり 29我わがをイスラエルの家にそそぎたれば 重ねてを彼らに隠さじ 主エホバこれを言う」（エゼキエル39･27～29）

非常に不思議なことが書いてある。

「我わがをイスラエルの家にそそぎたれば」

これはヨエル書と相通ずるところを持っている。そういった日が来るが、終わりにヨエル書２章３２節、

「32凡てエホバの名を呼ぶ者は救わるべし

「エホバの名を呼ぶ者は救われる」

という。「神の名を呼ぶ」と、ただこういうように読みますと、

「『名を呼んで救われる』とはどういうことだ？」

と、すぐ思う。「御名を呼ぶ」ということは、全託しなければ「御名を呼ぶ」ことはできない。疑った気持や何かで御名は呼べない。「御名を呼ぶ」ということは、自分を本当に投げ入れて、そして、神に全幅の信頼をすることが「御名を呼ぶ」ということです。だから、「御名を呼ぶ」ということと、

「全幅の信頼をもってやって来る」

ということが同じ意味なんです。それが救われる。

「キリストの名を呼ぶ」

ということもそうです。疑いの心があったらダメなんです、祈りというものは。祈りは、

「こうなるだろうか？　こうなってほしい」

なんていうことではなくて、祈りというものは「乗り移る」ことなんです、キリストの中に。だから、御名を呼ぶという。祈るというのは、その中に自分を投げ入れること。そうすると、神さまは、投げ入れた者を必ず最善にして下さる。そこで御意が成るんです。我々の願い以上のことが成る。あるいは、願いに反することが成る。反することが成ることが、あるときは、願いが成っていることなんです。我々の願いの如何にかかわらず、全部それをぶちまけることが「御名を呼ぶ」ということ。いいですか。それは救われる。

# ●遺れる者

そこで、もうひとつ大事なことがあります。

そはエホバのいし如く シオンの山とエルサレムとに救われし者あるべければなり 其れる者の中にエホバの召し給えるものあらん

この「れる者」というこの言葉。あなた方は、我々はこの「遺れる者」なんです。ミレーの絵に「落ち穂ひろい」というのがありますね。あれは、

「貧しい人たちのために全部、麦を刈りとるな。むしろ、適当にこぼしておけ、落ち穂を置いておけ。貧しい人が来てそれを拾って助けられるから。残りなく集めるものではないぞ」

と、そういった哀れみの気持があの「落ち穂」なんです。神さまの国に――今度はそれがまた逆の意味です――「遺された者」がある。刈り取られて火に焼かれてしまうのが多い。ところが、遺されて火に焼かれない民。これはイザヤが言い出した言葉なんです、この「遺れる民」というのは。

「遺れる者がエホバの召しにかかわる」

と。今、日本におきましても、世界においても、キリストに本当に信じ込んで、そして信仰を貫いている者、これが「遺れる者」です。どんな迫害に遭っても、絶対に屈しない。これが「遺れる者」。そういう意味において、末の日には遺れる者が本当に神の国に入っていく。

「主の日」とか「末の日」とかいう。日曜日はこの「主の日」なんです。日曜日をはずすと、「遺れる者」の中からはずれる。昨日から私はなぜこんなにしつこく言うかというと、日曜は主の日なので、キリストのの日でもある。ヨーロッパでもアメリカでも、まだとにかく日曜は守られています、一応。けれども、

「主の日に本当に遺れる者、青年が少ない」

と、昨日も言ったでしょ。振るわれてしまって、残っていない。ところが、形式でただ守ったってしょうがありませんけれども、本当に私たちは何としてもこの日曜日は「主の日」として守る。即ち、最後の審判で遺れる民として神の国をつぐ者、神の国に入る者は、地上の生活でいうと主の日を本当に貫いていく。そして、この六日間の労働をしっかりやっていく。そういう意味においても、今日、私が「主の日」とかかげた、その主の日において、どうぞ、皆さんは、日曜がそれほど私たちの信仰の生活において、また、偉大なる神の国をつぐ一つの準備として、主の日が大事であるか。たとえ集会に来れなくても、主の日はそれらしい気持をもって必ず送るということ。これは是非とも、今度の集会の最後の私の言葉として、これを守っていただきたい。

「二、三人わが名において集まるところに我あり」

と。あれは「ところにも」ではない。「ところに我あり」と。エクレシア、集会の一番の中核をなすところの事態は、「二、三人わが名において集まるところ」、これが本当の集会です。あなた方が何人いようと、その質は「二、三人わが名において集まるところ」。これは特にこの主の日において、日曜日はそれだけの意味を持っている。そして、神の最後の日に連なっている。今、あなた方がこうやって集まっていらっしゃるのは、これは「遺れる民」としての集まりです。

イザヤ書の６章１３節に、

「13そのなかに十分の一のこる者あれども 此もまた呑みつくされん されどのこりてこの地の根となるべし」（イザヤ6･13）

凄いことが書いてある。いわゆる「のこる者」の中に最後にのこる者はいよいよもって少ない。「」とありますね。これはマラキ書にも出てますが、特に新約のローマ書１１章にまたそのことが出ています。

「1されば我いう、神はその民を棄て給いしか。決して然らず。我もイスラエル人にしてアブラハムのベニヤミンのの者なり。

パウロは非常に直系なんだ。

2 神はそのじめ知り給いし民を棄て給いしにあらず。汝らエリヤに就きて聖書に云えることを知らぬか、彼イスラエルを神に訴えて言う、 3 『主よ、彼らは汝の預言者たちを殺し、なんじの祭壇をち、我ひとりりたるに、亦わがをも求めんとするなり』と。

これは列王紀略上の１９章に出ている。

4 然るには何と云えるか『われバアルに膝をめぬ者、七千人を我がためにし置けり』と。

ここにも「る」とあるでしょ。

# ●恩恵の選び

5 斯くのごとく今もなおの選びによりて遺れる者あり。

私たちはこの「の選び」によったんです。我々の資格ではない。恵みの選びによって遺った者がある。遺れる民です、さっき言ったイザヤ書６章のところです。

6 もし恩恵によるとせば、もはやによるにあらず。然らずば恩恵はもはや恩恵たらざるべし。

「恩恵」とは即ちキリストが「恩恵」の主体です。「恩恵による」というのは「キリストによる」と同じことです。ただいわゆる「恵まれた」ということではないですよ。「キリストの恵みの選び」というのはキリストの選びということ。

「もし恵みによるとせば、行いによるのではなくて、キリストの恩寵、キリストという恩寵によった」

と。それでなければ、恵みは恵みではない。

7 さらばに、イスラエルはその求むる所を得ず、選ばれたる者は之を得たり、

イスラエルは選びの民であったけれども、その選びから自分が脱落してしまった、不信によって。

その他の者は鈍くせられたり。 8 『神は今日に至るまで、彼らに眠れる心、

「眠れる心」というのは麻痺したような魂のことをいう。

見えぬ目、聞こえぬ耳を与え給えり』

「聞けども聞こえず」

という言葉がイザヤ書にある。

〔註：「9エホバいいたまわく 往きてこの民にかくのごとく告げよ なんじら聞きてきけよ 然どさとらざるべし 見てみよ 然どしらざるべしと」（イザヤ6･9）、「20汝おおくのことを見れども顧みず 耳をひらけども聞かざるなり」（イザヤ42･20）〕

とされたるが如し。 9 ダビデも亦いう『かれらの食卓はとなれ、となれ、つまずきとなれ、報いとなれ、10 その眼はみて見えずなれ、常にその背をめしめ給え』11 されば我いう、彼らの躓きしは倒れんが為なりや。決して然らず、反って其の落度によりて救は異邦人に及べり、

パウロの歴史哲学、神の摂理です。イスラエルの民が頑なで躓いたために、逆に恵みが求めざる者に発見された。

「我求めざりし者に見いだされたり」

という不思議な言葉がイザヤ書６５章にあります。

「1我はわれを求めざりしものに問いもとめられ 我をたずねざりしものにされ わが名をよばざりし国にわれえらく われはにあり我はここに在りと」（イザヤ65･1）

即ち異邦人です。そういったようにして、恵みは逆に来たけれども、それはただイスラエルが捨てられたのではない。一応彼らの不信のために捨てられたけれども、最後はイスラエルが救いにあずかる。そうしたら、世の終わりは来るぞと。

まだイスラエルはダメですね、相変わらず。キリストを認めませんから。「イスラエル、イスラエル」なんて言って騒いでいる方々もあるようですが。何しろ、イスラエル人中のイスラエル人であるパウロがあれだけ鮮やかなカタストローフを自分自身が起こした、大転換をした。

「あのパウロは間違っている」

と言っているんだからね、そしてキリストを認めない。

その頑ななユダヤ人の信仰のチャンピオンなんだ、パウロは。それがキリストに引っくり返されて、そして本当にキリストの僕とされ、驚くべき使徒に――彼は使徒中の使徒ですから――新約聖書の何といったってその意味においてパウロは中心です。この大転換をした。それは天変地異どころではないんだ、パウロの転回は。

# ●劇的な有機体的な神学

そのパウロの驚くべき転回をさせたのがキリストなんですから。正にパウロの生涯が、この神の歴史を縮小した縮図みたいなものですよ、あのパウロというやつは。旧約聖書の権化みたいなパウロが引っくり返されて、彼は新約聖書の権化になったんだから。パウロという人物の、またその福音の構造のもの凄さ。ドラマーテッシュ（dramatisch）にしてオルガーニッシュ（organisch）な。だから、私は自分の神学は組織神学とはいわない。これは

「劇的な有機体的な神学」

と、私は打ち出すつもりですから。そういう……（異言）……、私たちはユダヤ人の躓きによって、救いが異邦人に向かってきた。そこで、このチャンスを取り損なって、遺れる民にならなかったら、本当にこれは恵みを恵みとして受けないことです。

11 されば我いう、彼らの躓きしは倒れんが為なりや。決して然らず、反って其の落度によりて救は異邦人に及べり、これイスラエルを励まさん為なり。 12もし彼らの落度、世の富となり、その、異邦人の富となりたらんには、まして彼らの数満つるに於ておや。

その時が来たらば、これは全部引っくり返ると。

そして今度は、オリーブの譬えをもってまた言っているわけです。

17 しオリブのの枝きり落とされて野のオリブなる汝、その中にがれ、共にその樹のある根にらば、 18かの枝にいて誇るな、たとい誇るとも汝は根を支えず、根は反って汝を支うるなり。

接ぎ木された者が元木に威張ることができるかなんて、またイスラエル的なことを書いている。２２節、

22 神のと、そのとを見よ。

即ち、「審判と恩恵を見よ」ということです。

は倒れし者にあり、仁慈はその仁慈にまる汝にあり、

私たちはこの憐れみ、情け、恵みにとどまる。それが遺れる民です。３２節に、

「 32神は凡ての人を憐まんために、凡ての人を不順の中にめ給いたり。 33ああ神の智慧と知識との富は深いかな、そのは測り難く、そのは尋ね難し。34 『たれか主の心を知りし、誰かそのとなりし。

これもイザヤ書４０章の言葉。新約聖書からイザヤ書をとると、かなりのものが抜けてしまうくらいに、イザヤの預言というのは素晴らしい意味において成就しているわけです。

36 これ凡ての物は神よりで、神によりて成り、神に帰すればなり、栄光とこしえに神にあれ。アァメン。」（ロマ11･ 1～36）

もう彼は手紙を書きながら、讃美したり、やりきれないです。

そういう意味において、この「遺れる者」。私たちは主の日を本当の意味において守って――「守る」というのはただ律法的に守るのではないですよ――これは守らざるを得ない。主の日は戦わざるを得ない。どんな事情があっても突破して来る。そして、

「キリストを選ぶか、この世のことを選ぶか」

となったら、何を言われても、

「私はキリストを選ぶ」

と。それはまぁ我々の生活の上では、どうしても仕方がない面もあります。そのときはそれでいい。けれども、そのために負けてはダメなんです、絶対に。どういう場合におきましても、絶対に負けてはいかん。日本では、日曜日に学校の何かをやってみたり、とんでもないよ、こういう生活は本当は。

どうぞ、そういう意味においては、本当に主の日を尊ぶ。夜でも何でもいい。時間があったら、二、三人で集まって主の日らしく祈ったらいい。何とでも出来ます。それだけの戦いをしてもらいたい。私は自分のことを言ってはおかしいけれども、正直、２０歳から今日に至るまで、ほとんど戦いいてきました。そういうことで、私は今日、「主の日」と書きながら、本当にそうだと思った。

# ●審判の時

そこで更に今度は、終末論に入っていきます。第３章──即ち原文の第４章──日本語の第３章です。

1 よ 我ユダとエルサレムのを帰さん その日その時 2万国の民を集め 之を携えて ヨシヤパテの谷にくだり かしこにて我民 我ゆずりの産なるイスラエルのために彼らをさばかん 彼らこれを国々に散して その地を分かち取りたればなり

これはバビロニヤ捕囚の後の文句ということが、大体これで分かるわけですが。捕囚から還ってきたのが紀元前５３９年。紀元前５１５年に第二神殿ができて、それ以後の神殿を中心とした祭司的な宗教のことを「ユダヤ教」という。狭い意味の「ユダヤ教」というのはそういうことです。だから、神殿中心の民で、もはや国民ではない。大きな宗教的な集団なんです。そこでもって讃美歌が歌われた。それが「詩篇」です。詩篇の起源はもちろんダビデあたりから始まっています。

3彼らはをひきて 我民を取り をにえ を売り 酒にて飲めり

そういう悪いことをして、イスラエルの民はさんざん苦しみに遭った。「デｨアスポラ」（ Diaspora）「四散したもの」という。それをヨシャパテの谷に集めるという。「ヨシャパテ」というのは、比喩的に言っているので、なにも「ヨシャパテの谷に集める」ということが、何か一つの谷の中に集めるということではない。歴代志略下の２０章にこの「ヨシャパテ」のことが出ています。それはもちろん或る地名ではある。

4ツロ、シドンよ ペリシテのすべての国よ 汝ら我と何のかかわりあらんや

「ツロ、シドン」はもちろんフェニキアの代表的な町です。「フェニキアよ」ということと同じこと。「日本よ」の代わりに「東京よ」とか言うのと同じことです。

汝ら我がなししことにをなさんとするや し我にをなさんとならば 我ちに汝らがなししことをもてそのに帰らしめん

逆に復讐するぞと。イスラエルの民が半奴隷状態でもっていろいろ迫害にあった。そしてこれを使った。こういうことは歴史で繰り返される。ギリシアでもそうです。奴隷。一番酷いのはローマ。ローマの繁栄は奴隷を使役してできた。エジプトでもそうです。あのピラミッドというのは奴隷的な労働者を使ってやったわけですから。

よく昔から王侯のいろいろな宝物があるでしょ。そして、展覧会なんかやる。あれはみな権力者が勝手なことをして集めた物で作ったようなものだから、本当はあんなものを喜ぶのはおかしい話だ。それを文化文明の遺産のように思うけれども、その裏には涙の歴史がある。そういうことをしているうちにローマは遂に奴隷のもの凄い反乱があったでしょ。

パウロがいた時も、その奴隷という事態が非常にあった。この「」という言葉が「奴隷」という字ですけれども、「キリストの僕」ということは支配者の意志に完全に従うこと──「僕」という言葉は元々はあまりいい言葉ではない──しかしながら、相手が悪いものではないんだ。キリストとか、神とかいうのは絶対者ですから、それの僕となるということは、逆にこれは――マルチン・ルターが『キリスト者の自由』で書いている通り――本当の自由がきている。自分の自由に死ぬところに本当の自由がくる。だから、「自由、自由」なんて言ったって、実は本当の自由は絶対者の僕となるところに本当の自由がある。

「弥陀の本願の劫力にあずかる」

ところに、本当の浄土真宗、浄土宗の力があったわけでしょう。そういう意味において、いわゆる民主主義の自由なんてものは、ちゃんちゃらおかしいわけです。

真理というのはおもしろいのでね、素晴らしい逆説的なものを、絶対的な世界に入ってくると、逆説的な表現でもって実は本当のことが表れてくる。

5是は汝らは我の金銀を取り 我のしたうべき宝を汝らの宮にたずさえゆき 6またユダの人とエルサレムの人をギリシヤ人に売りて その本国より遠く離らせたればなり

これが正に今、私が言った奴隷のことです。

7視よ 我かられをして 汝らが売りたる処よりし 汝らがなししことをもて そのにかえらしめん

逆にイスラエルを本当に救う時がくると。その終末的な救いの預言ということになってくる。そこで９節、

9もろもろの国にべつたえよ のをし

妙なことが書いてある。「もろもの国」ですよ、イスラエルに言っているのではない。

勇士をはげまし をことごとくちかより来らしめよ 10 汝等のをに打ちかえ 汝らの鎌をに打ちかえよ

これはイザヤ書の言葉の逆を言っている。イザヤ書２章とミカ書４章に出ている。イザヤ書２章４節、

「 4エホバはもろもろの国のあいだをき おおくの民をせめたまわん〔審判せん〕 斯てかれらはそのをうちかえてとなし そのをうちかえて鎌となし 国は国にむかいて剣をあげず のことを再びまなばざるべし」

とある。それと同じような句がミカ書４章にあります。これは本当の平和をきたらせるためには、そうだと。ソ連の国旗に「鎌」が書いてありますが。ところが、ソ連はその鎌をまた逆に今度は剣にしているようだが。これはけしかけているんだね、

「おおいに戦争の準備をしろ。鋤を剣に変えろ」

と。

弱き者も我は強しと言え 11 の国々の民よ 汝ら急ぎ上りて集れ エホバよ 汝の勇士をかしこにしたまえ

ここのところの、

「エホバよ汝の勇士をかしこに降したまえ」

というのは預言者の言葉なんです。そこで、

「天の万軍をして彼ら逆らうところの国々をやっつけて下さい」

ということです。

12 国々の民よ て上りヨシヤパテの谷に至れ に我座をしめて 四周の国々の民をことごとくかん 13 鎌をいれよ 穀物は熟せり 来り踏めよ はち は溢る 彼らの悪なればなりと

今度は、神さまがイスラエル向かってこういうことを言っているわけです。ある意味において、イスラエルは不信のためにいじめられる。それは神さまの仕事です。それから今度は、そのことが終わると、そのいじめた奴らは逆に審かれる。そういったようなドラマチックな構造になっている。

14 かまびすしきかな 無数の民の谷にありてかまびすし エホバの日審判の谷に近づくが故なり

審判の時がきて、審判は今度は他の国であろうと、イスラエルの民であろうと、要するに神の審判は不信なもの、またこの世の秩序を悪い意味で乱したもの、これに対する審判はもちろん公平に来るわけです。そして一番、審判のするどく来るのはイスラエルの民それ自身です。遺れる民にならなければ、

「自分は御国の子らと言ってもダメだ」

と、これはキリストも言ってらっしゃる通り。だから、

「クリスチャンだからいいなんて、いい気になっていたら却ってダメだ」

ということも言えるわけです。

# ●御霊でなければ生きられない

もういよいよ終わりの方にきますが、

18 その日山にあたらしき酒り 岡に乳流れ ユダのもろもろの河に水流れ エホバの家より流れいでて シッテムの谷にがん

「シッテムの谷」というのは出エジプトをして最後にたむろした所の谷の名前です。

19 エジプトは荒れすたれ エドムは荒野とならん

「エドム」はしょっちゅうイスラエルの敵であった。トランスヨルダン〔ヨルダン川の向こう側、東岸〕の地方です。

是はかれらユダの子孫をげ なき者の血をその国に流したればなり 20 されどユダはにすまい エルサレムは世々に保たん 21 我さきにはかれらが流しし血の罪を報いざりしが 今はこれをむくいん エホバ、シオンに住みたまわん

ここでお終いになっているけれども。そこで、これは旧約の預言の中にはやはりひとつの境がありますから、我々の新約の光で読むと、

「ユダはにすまい エルサレムは世々に保たん」

というのは、「ユダ」とか「エルサレム」とかいう言い方で、まことの遺れる民、また天のエルサレムをぐところの真のイスラエルのこと。この霊的なイスラエルのことはパウロがローマ書でもってと語っている通りです。

審判を越えて最後に遺れる民の質は何かというと、これは何といっても、自分でもって自分の心の歴史の中で神の審判を受けて、

「参りました！」

と言って、

「ああ、我は悩める人なるかな、この死のからだ」

という。そこで神の審判を直接に受けたら、我々は死んでしまう。しかし、その審判をキリストは十字架で受けられた。十字架で我々の審判を受けられた。だから、私たちはキリストの十字架によって、我執、不信、不義、一切のものから贖い取られた。

そこで、この遺れる民の資格は何かというと、聖霊なんです。遺れる民の資格は我々の側にはない。恵みの実体は即ち聖霊なんです。聖霊が恵みの実体で、「恵まれたる者」と「遺れる者」とは同じ意味になる。この御霊を注がれて、キリストの生命が私の中で、皆さん一人びとりの中で生きている。

「われ生く、されど、もはや我にあらず、キリストわがうちに在りて生き給うなり」

という、あの言葉が何といっても我々自身の告白となるまでは、本ものになれない。

「パウロはそうでしょうが……」

ではないです。パウロの言葉が我々自身の告白となって、

「キリストわがうちに在りて生き給うなり」

ということにならなくては。そうすると、すぐこう思うんです、

「『キリストわがうちに在りて生き給うなり』と言いながら、なんだ、あれは大したことはないじゃないか」

なんて。大したことがないから生きて下さるんですよ。いいですか。立派だからキリストは生きて下さるのではない。我々はお互いさまゴミみたいなやつ、土の器だ。それがそうであるから、キリストは中に入って、土の器を金剛石に変えてしまう、金剛心とされる。

我々は荒金みたいな、こんなわけのわからない形をしている。ところが、ここに御霊がある。御霊があるから、これを十字架を通して無条件に受けとる、十字架という門を通して。これは自分でこれが破れない。「破れ器」なんて言ったけれども、本当に破れてはいない。本当に破れるのは、十字架で破られている。私はよく「破れ」と言うけれども、人間的な相対的な破れはどっちだっていいんだ、そんなものは。本当にこの私を破ったものはこの十字架なんです。十字架が頑なな私を破る。私は正直、相対的にいってちっとも頑なな人間ではありませんけれども、人間的な頑ななんてものは問題ではない。それは問題でないけれども、それが破れないのが人間の情けなさ、これが「罪」というやつ。即ち、頑なさとは何かというと、「我執」です。これは万人が持っている。

「すべての人は罪びとである」

というのは、エゴイズムだということ。このエゴが――神さまはある意味においては、そういう性格も与えているかもしれない――このエゴというやつが文化文明を展開していると、相対的には言える。それがなければ展開しないということも言える。けれども、それをやっていると引っくり返ってしまう。

その我執的なものは、この我が大我に、小我が大我に変わる。その小我が大我に変わるところの「大我」というのがこの聖霊なんです。パウロは小我中心の強いやつだった。これが引っくり返されて、大我が入ってきた、聖霊が入ってきた。そうしたら、彼の生まれつきのいろんな強さが全部、キリストにおける強さになってしまった。自分を誇っていたのが、キリストを誇ることになってしまった。彼はなかなか誇りの強い男だったとみえる。それが自分を誇らないで、キリストを誇ることになった。エレミヤの中にもその言葉があります、「神を誇れ」と。

そうことになりましたから、これが入ったら、他の人がどう見ようと、そんなことはいいです、そんな毀誉褒貶は。

「この御霊で私は生きている。私はもう御霊でなければ生きられない」

と。それが爆発してものを言っているんです。

# ●聖霊という霊子

自然界でいう。水素という原子はほとんどこの陽子がその中心になっている。「原子核は陽子そのものだ」と書いてあったよ。私たちの陽子はこの聖霊なんです。だから、私はそれを「」とも言う。この霊子は、原子爆弾や水素爆弾がこようが、この霊子はそれよりも強い。永遠の生命を持っている。まずキリストの御霊が来てしまったら、これはどうにもならんね。あなた方はそういう嬉しさを持っていますか。

「信仰によって義とされる」

なんて、そんな観念的なことなんかもうどうでもよくなってしまった。もちろん、「信仰によって義とされる」というのは、

「その霊子を信受したことによってキリストの義を賜っている」

という意味だよ。まぁ私がもし今、大声を出したら、大変な大声になりそうだ。やめるけれども。そうですよ、沈黙の叫びという。無言の叫び。やっぱり無の世界。そういうクリスチャンというのは一体何人いるんだろうね。……

これを持っている人が、「主の日」を迎えている人なんです。最後の審判に遺れる者は裁かれないで、そして、キリストの恩寵のゆえに本当に

「ああ、主よ、きたりたまえ」

と言う。

「御国よ、きたりたまえ」

というのは、既に来ているから。歴史の終わりは既に私たちの中に来ているんです。

「神の国は汝らの中にあり」

というのがそのことなんです。我々は神の国を既に持っている。いつぶっ倒れても、神の国の民なんだ。これは霊子を、聖霊をいただている。「プニューマ」（pneuma）を、聖霊なる霊を。「Ｐ」という字は、ダンテの『神曲』では「ペッカタ」（peccata）という「罪」という字で、七つの罪を額に刻まれて、それが煉獄を上がっていくうちにだんだん消されて行くということが書いてある。あの「Ｐ」ではないよ、これは。ドイツ語では「ガイスト」（Geist）の「Ｇ」、英語の「ゴースト」（ghost）だね。

そういうことで、「主の日」というものは、我々が日曜日を「主の日」として迎え、また毎日が私たちの、ある意味においては、「主の日」を迎えている「主の日」の民である。「かの日」「そのとき」「末の日」と──何と言ってもいいよ──それは私たちにとっては「主の日」なんです。即ち、恩寵を受けとって審判はぬけてしまう。既に十字架において私たちは審判を受けとって、罪から解放されてしまっている。だから、いい気になるのではないですよ。いよいよ平伏して行くんです。「平伏す」といったって、人間的な謙遜ではないですよ。

「何もありません、あなただけです」

と。まぁね、青年にそういうことを言うと、

「『何もありません』なんて、困るではないか。大いにいろんなものがあるではないか」

と。あるよ、いろいろ。しかし、そんなものは問題ではない。この絶対的な有るというものに対しては、無きに等しい。……（旧制一高の岩元 禎（1869～1941）というドイツ語の哲学の名物教授の話省略）……

これがその絶対的な境地なんです。私たちは１００パーセントに。信頼というならば、９９信頼するのではない。１００パーセントです。「自分がどうだこうだ」なんて問題じゃない。キリスト一点張りだ。そうすると、キリストの方からもう自由自在に創造的なものを下さる。展開していく、行き詰まらない。そういう人間になる。同じことを言っても、内容が違う。信仰はそのような絶対無条件な世界です。そうすると、

「絶対無条件にはなかなかなりませんが……」

と、すぐそう言うでしょう。そうじゃないんだよ、こんな楽なことはないんですよ、絶対無条件というのは。絶対無条件なんだから、資格は要らないんだから。あるがまま投げ出せばいい。「あるがまま」がいいのではない。

「あるがまま、そのままを投げ出す」

ことだけです。それが祈りなんです。何をやっていても、それが祈りなんです。投げ出しているから。

「己を捨てろ」

と言ったって、キリストの中へ捨てるのだから、こんな楽なことはない。そうすると、えらいことが始まる。

私たちは、どこに投げ出されているんですか。「ゲヴォルフェネスザイン」（Geworfenes-Sein）なんて、ハイデッガー（Martin Heidegger, 1889～1976）が言うけれども、「投げ出されている」というのは、私たちは空気の中に投げ出されている。どこにどう歩こうが、どう寝ようが、どう引っくり返ろうが、空気の中だよ。そのように、どうなろうが、これは「キリストの中」ということ。そういう図太い信仰にならなければ、ダメですよ。

「私の信仰はまだまだで」

なんて、何が「まだまだ」か。自分の信仰なんかを当てにしているから。そんなものは、

「私は自分の信仰なんかありません。恩寵だけがあります、恵みだけがあります」

と言う。だから、行きつまらないです、絶対に。力んで言っているのではないですよ、絶対に行きつまらない。それで、いろんなことにでっくわせばでっくわすほど逆に力がくる。ありがたいね、これは。

「そうだっ！」

と誰か叫んだっていいんだ。あなた方は沈黙で叫んでいるんだろうが。

そういう、「主の日」。もう毎日がこの「主の日」になってしまうが、特に日曜日はその意味においてそうなんです。……

# ●信・望・愛

とにかく、神の国の最後の、この黙示録で示しているところの最後の日の輝かしい大希望――信・望・愛というが――この大希望がまた私たちの生命力のひとつの元素でもある。

おもしろいんだね、私は藤井武先生の集会に最初に行った日に黙示録の２２章を先生は語った。先生が地上を去る最後にやっぱり黙示録２２章を語って、先生はそれから７月１４日、２週間後に――６月３０日が最後の集会で黙示録２２章に来てしまった――ちょうど一年間、先生は黙示録を講義した。あれを私は藤井選集第６巻に書きました。あれは実は先生との合作なんだよ。黙示録２２章に始まって、黙示録２２章に終わった。始めと終りが一つ。私は本当に新天新地の大希望が私の希望です。それでなければ私の魂は窒息するよ。しかも、その大希望は──藤井先生自身は奥さんが向こう側に行ってから非常に天国的な人になってしまったけれども──まだあの時代はかなり希望が理想主義的な角度の希望だった。ところが、この終末的な希望というのは、現在的終末として既に来ている。だから、確実なんです。

「御国をきたらせ給え」

は、御国が来ているから祈れるんです。黙示録の最後の素晴らしい世界はもう双葉の如くに私たちの中にある。

藤井先生の詩はついに黙示録の前半三分の一くらいで終わってしまった。私は先生の先を書くわけではない。書くわけではないけれども、最後に何か私はやりますから。その時は、集会は――まぁ集会はやるよな――これはもう打ち込みますから。それが終わるまでは死ぬわけにいかん。それはダンテの「天国篇」に負けないものを書くから。そんなことを今から約束したって、

「先生はとうとう書かないで死んでしまった」

なんて、そうかも知れないよ。とにかく、その黙示録の終わりの所の１８章あたりからあとの所は、あの輝かしい事態はもう読めば、私は現在のようにして生き生きとやってくるんです。そこに既に私は生きているんです、私の魂は。

信は十字架の信です。望はこの黙示録の終末のところ。愛はキリストの霊、聖霊なんです。十字架と聖霊と最後の主の日。これが信愛望なんです。いいですか。ただ観念で信愛望なんて言っているのではない。具体的にそうなんです。十字架のないところに何が信仰があるか。聖霊のないところに何が愛があるか。黙示録の最後の新天新地が我々の現実として今この魂の中に生き生きと生きていないで、何の希望かと。こういうことです。

それがゆえに、本当に毎日のやっていることが決して空しくない。いいね。必ず実がみのる。地上では実なんか実ったって実らなくたっていいよ。本当の実は、花が咲き実がみのるのはみな天界においてです。その天界においての……（異言）……姿はとても今私は表現できない。そのうちに表現してやろうと思っているけれども。えっ、驚くなよ。

もう預言者たちがよってたかって、その先を見ている。彼らはユダヤ的な制限はあるけれども、それを突破したのはパウロ、ヨハネ。預言者たちの精神を本当に受け継いだのはこの使徒たちです。それを在らしめているものは全部、キリストに流れこみ、キリストから流れ出ている。大変な人だよ、イエスという人は。ああ。もう説明なんかできやしないです。

皆さん、この福音とはそんなおそろしい、過去・現在・未来を掌握しているような、地獄・煉獄・天国を全部ちゃんと掌握できるようなものです。だから、私はダンテという詩人は素晴らしいと言っている。もうイタリヤはダンテあるがゆえのイタリヤなんです。イギリスはシェイクスピアあるがゆえのイギリスだ。ドイツはゲーテあるがゆえのドイツだと言ってもいいくらいです。

まぁ大変だ。私はもうその烈々な、いかなる嵐も氷も消すことのできない、聖霊の炎でいきます。皆さんも、不滅のこの炎を、力を持ち、愛を持ち、生命を持っている。この聖霊ならずんば、我々はもうクリスチャンをやめたらいい。終わり。

# ●祈り

祈ります。絶大なる神さま、無限無量の御霊の神さま、この預言者ヨエルを通し、特に聖霊の事態を中心としたこの預言、これが遂にペンテコステに成就しました。また、私たちにとって、この秋の京都・大阪召団の集会が一人びとりにとってひとつのペンテコステ的質を持ったものとなったことを感謝いたします。

兄弟姉妹たちを、どうぞ、あなたが一人びとりをのっぴきならない存在としてつかまえ、そして、あなたの御業を──人の知る知らざるにかかわらず──栄光を現じたまわんことを切に願い奉ります。御霊は一つ、主は一つ、御霊のバプテスマは一つ、神は一つ。この一なる信仰の事態、一如の事態を、神さま、感謝いたします。

この兄弟姉妹たちを通して、どうぞ、身辺にあなたの御国を展開して下さい。そして、必ずキリストの十字架の土台をもって、聖霊の展開するところは天下無敵です。無敵とは相手を救い上げることです。神さま、どうぞ、そのようにして。ああ、何たる主さま、言葉に絶します。

ヨーロッパにあるところの、錦織君や、栗崎幸子さんや、井上順子、白取君たちを、どうぞ、それぞれの所において御霊の子ららしく、力強く、また大きな包みを持った心をもって進ませて下さい。

キリストのあるところ、至る所これ天国です。この大希望とまた底抜けの愛と、また驚くべきこの贖いの事態、信を貫かしめられ、進んで行きます。この集会はまだ感話懇親会がありますが、どうぞ、本当の御霊における愛のコイノニアを展開して下さい。また、この兄弟姉妹たちを通して、この福音に喜び驚く魂を起こして下さい。私たちにとって、そのような現象が起きること、ひと一人の魂があなたに帰ること、これほど嬉しいことはありません。どうぞ、そのようにして、人を帰らしめるその伝道者として、この一人びとりを自在にお使い下さらんことを願い奉ります。

どうぞ、一人びとりの胸に溢れるところの感謝と願いを御名にあって聴いて下さい。今、心からの感謝と讃美とまた希望と祈りと、主イエス・キリストの御名により捧げ奉る。アーメン。

讃美歌１６８番「イエスきみの御名にまさる名はなし」を歌います。